

大学生における母親との心理的距離と援助要請行動の関連

Psychological Distance from Mothers and Help-Seeking Behaviors among University Students

二村 友希

Yuki Futamura

永井 智

Satoru Nagai

森本 浩志

Hiroshi Morimoto

本研究では、大学生の母親との援助関係と心理的距離、援助要請行動との関連について、母親との同居の有無と性別を考慮して、大学生148名のデータを用いて検討した。母親との援助関係は親子関係親密さ尺度（山崎・杉村・竹尾, 2002）、母親との心理的距離は吉岡・野口（2019）を参考に作成した1項目、援助要請行動は援助要請スタイル尺度（永井, 2013）を用いて測定した。親子関係親密さ尺度は探索的因子分析を行って再構成した。その結果、母親と同居している男性および女性（同居の有無を問わず）は、母親との援助関係が親密であるほど母親との心理的距離が近いこと、心理的距離が近いほど援助要請過剰型が多く、援助要請回避型が少ないことが示された。一方で、母親と別居している男性は、母親との援助関係が親密であるほど母親との心理的距離が近いことが示されたが、心理的距離と援助要請行動の間には有意な関連が無いことが示された。

キーワード：援助要請行動, 心理的距離, 親子関係

問題と目的

大学生は日常的に様々な悩みを経験する。その中で自身の力のみでは解決できないような悩みに直面した場合は、他者に相談し援助を求めることが重要な対応策となる。このような他者に援助を求める行為は「援助要請行動」と呼ばれている。援助要請行動についての研究は、相談者にとって身近な存在でありかつ問題を抱えた場合に相談をしやすいという点から、大学生では援助要請行動の相手として友人を対象とした研究が多く行われている（木村・水野, 2004）。一方で、大学生が援助を求める対象者としては、友人に次いで家族が多く（與久田・太田・高木, 2011）、特に父親よりも母親に対する相談行動意図が高いことが指摘さ

れている（武田・石田, 2013）。母親は子にとって重要な存在であり、子が青年期になり親友を得た後でも、大部分の者では母親との結びつきは大きく崩れることがないとされる（金子, 1989）。また、小高（2008）は青年期の者は、父親に比べて母親からポジティブな影響を多く受けるだけでなく、母子の密着性も高いことを指摘している。さらに18歳から20歳の半自立・半依存的な時期（成人生成期）では、子どもは母親との信頼関係を高めながら、心理的に自立していくことが指摘されている（水本, 2019）。このことから、大学生においても母親は重要な援助要請の対象者であると考えられるが、大学生の援助要請行動に関するこれまでの研究では、援助を求める相手として家族、特に

母親を対象とした研究は少ない。

ところで、これまでの援助要請行動の研究では、援助要請行動の有無に焦点が当てられることが多かったが、どのような援助要請行動を行うのか、つまり援助要請行動のタイプ（型）にも注目する必要があると考えられる。永井（2019）は援助要請行動を「援助要請自立型（自立型）」、「援助要請回避型（回避型）」「援助要請過剰型（過剰型）」の3タイプに分類した。自立型は困難を抱えた場合でも、まずは自分で問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助を要請する傾向を示し、過剰型は問題が深刻ではなく自分で取り組むことが可能な場合でも、安易に援助を要請する傾向を、回避型は問題の程度に関わらず一貫して援助要請をしない傾向を示す。永井（2019）は、自立型に当てはまる者は悩みと適切に距離を保ちながら向き合うことができ、最もバランスが取れたタイプであるとしている。一方で、回避型に当てはまる者は他者の力を借りることができず、自分自身でも対処に困難を経験している可能性のあること、過剰型に当てはまる者は悩みを成長の機会として捉える肯定的な側面と、悩みを取り除くべき苦痛として捉える否定的な側面を持つとしている。しかしながら、援助要請行動のタイプに影響を与える要因については知見が限られている。大学生において家族、特に母親との関係性の重要性が指摘されていることを踏まえると（金子, 1989；小高, 2008；水本, 2019；武田・石井, 2013）、母親との関係性が大学生の援助要請行動のタイプに関連していることが考えられる。

本研究では、母親との関係性を表す指標として、「自己がある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど親密で理解しあった関係を持っていると感じているかの度合い」を表す心理的距離（金子, 1989）を取り上げる。青年期は親との関係が大きく変化する依存と自立の間で揺れる時期であることから（吉岡・野口, 2019）、青年の心理的距離の取り方はスタティックなものではなく、相手とどこまで親しみ、どれだけ隔たりをおいたらよいかを決めるよりどころを求めて絶えずダイナミックに揺れ

動くものであると考えられている（藤井, 2001）。このようなダイナミックな親との心理的距離に影響を与える要因として、先行研究では援助者の個人特性（技能、スキル、価値観など）や、被援助者の個人特性（性格や生活背景など）、援助者と被援助者の援助関係、物理的な交流の頻度（物理的距離）などが指摘されている（小林, 2019）。そこで、本研究では援助者と被援助者の援助関係および物理的距離が、母親との心理的距離を通して援助要請行動に影響を与えるプロセスについて検討することにする。なお、本研究では援助者として母親、被援助者として大学生を想定しているため、援助者と被援助者の個人特性については扱わないことにした。

まず母子の援助関係については、本研究では親密・従属・甘え（依存）の3種類（山崎・杉村・竹尾, 2002）から検討する。いずれも親子の強い情緒的な結びつきを基盤とするが、方向性に違いがある（山崎他, 2002）。具体的には、親密は親子の相互的な結びつきを表し、従属は子から親への結びつき、甘え（依存）は親から子への結びつきを表す（山崎他, 2002）。武田・石田（2013）は、親との信頼関係が相談関係のポジティブな結果の予期に正の影響を与えることを指摘している。大学生において、親への相談実行の利益である「ポジティブな結果」を予期することが相談行動の促進において重要であり、「ポジティブな結果」を予期するためには、親との信頼関係を築けていることが重要になるとされている（武田・石田, 2013）。また、援助者が共感的態度により被援助者との信頼関係を築いていく際には、心理的距離が重要であり、被援助者と近づいたときは親密感が強くなるとされている（小林, 2019）。このことから、母子の援助関係において親密が高いほど心理的距離は近く、援助要請行動が起りやすくなると考えられる。一方で、従属や甘えは親と子の結びつきが一方的であるため、親子の信頼関係や親密感は強くないことが予想される。このため、従属や甘えが高いほど、心理的距離は遠く、援助要請行動が起りにくくなると考える。

物理的距離に関しては、母親との同居の有無の

観点から検討する。大学生では一人暮らしをしている者も少なくないが、一人暮らしの場合は、母親と同居している場合と比べて物理的な交流の頻度が減少すると考えられるため、一人暮らしをしている大学生は母親と同居している大学生と比べて、母親との心理的距離が遠くなることが考えられる。

以上を踏まえて、本研究では大学生を対象として、母親との援助関係と心理的距離、援助要請行動との関連について検討することを目的とする。また、友人や親に対する援助要請行動は男性よりも女性の方が多くことや(永井, 2012)、大学生では一人暮らしをしている者も少なくなく、母親との同居の有無が上記の関連に影響することも考えられることから、母親との援助関係と心理的距離、援助要請行動との関連が、性別や母親との同居の有無により異なるかどうかについても検討する。具体的な仮説は以下の通りである。

- 仮説1：母親との援助関係として親密が高いほど、母親との心理的距離は近い。一方、母親との援助関係として従属・甘え(依存)が低いほど、母親との心理的距離は遠い。
- 仮説2：母親との心理的距離が近いほど、自立型と過剰型の援助要請が多く、回避型の援助要請が少ない。
- 仮説3：母親と同居している場合は、同居していない場合と比べて、母親との親密が高く、支配・服従が低く、心理的距離が近い。また、心理的距離が近いほど、自立型と過剰型の援助要請が多く、回避型の援助要請が少ない。
- 仮説4：自立型と過剰型の援助要請は女性の方が多く、回避型の援助要請は男性の方が多い。

なお、仮説3については、母親との援助関係と心理的距離、援助要請行動の関連に性差が見られる可能性があるため、これらの関連の性差についても探索的に検討することにした。

方法

調査対象者

大学生148名(男性49名,女性98名,その他1名,平均年齢 20.74 ± 2.69 歳)を対象に、2020年10月6日から10月31日にかけて、大学の講義終了後の機会にweb調査への回答を依頼した。回答に不備のある者はいなかったため、148名全員のデータを分析に使用した。

本研究は、援助要請行動の対象を母親に限定するため、「母親は血縁関係にあるかないかに関わらず、母親の役割を担う者がいる場合を対象とする」と教示したうえで、質問項目への回答を求めた。調査協力依頼においては、調査票の冒頭に研究の趣旨や目的、調査への協力は自由意思に基づくものであること、無記名であること、プライバシーの保護、データの取り扱い等について記載し、文章と合わせて口頭で説明を行った。

調査内容

フェイス項目 年齢、性別、母親との同居の有無について回答を求めた。

援助要請行動 援助要請スタイル尺度(永井, 2013)を使用した。本尺度は援助要請自立型(自立型)、援助要請過剰型(過剰型)、援助要請回避型(回避型)の3下位尺度12項目で構成される。自立型は「相談より先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する」など、困難を抱えた場合でも、まずは自分で問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助を要請する傾向を示す4項目、過剰型は「よく考えれば大したことがないと思えるようなことでも、割と相談する」など、問題が深刻ではなく自分で取り組むことが可能な場合でも、安易に援助を要請する傾向を示す4項目、回避型は「悩みが深刻で、一人で解決できなくても、相談はしない」など、問題の程度に関わらず一貫して援助要請をしない傾向を示す4項目から構成される。回答は「1：全くあてはまらない」から「7：よくあてはまる」の7件法で求めた。

母親との援助関係 親子関係親密さ尺度(山崎他, 2002)を使用した。本尺度は、価値観と関係性の認知の2つの尺度により構成されるが、本研

究では関係性の認知の尺度のみ使用した。関係性の認知の尺度は、「親が落ち込んでいると私も落ち込む」などの含む親密さを表す11項目、「親にいろいろ言われると自分の考えがわからなくなる」などの従属を表す7項目、「すべてを言わないと親がわかってくれない場合イライラする」などの甘え（依存）を表す7項目の計25項目から構成される。本研究では、母親との関係性について、「1：全くあてはまらない」から「5：よくあてはまる」の5件法で求めた。

母親との心理的距離 吉岡・野口（2019）を参考に、1項目作成した。「あなたと母親がどのぐらい心理的な結びつきがあり、親密な状態にあるかどうかを表す心理的な距離として、現在あなた自身にあてはまると思われる数字を選択してください。」との教示のもと、「1：とても遠い」から「7：とても近い」の7件法で回答を求めた。

結果

親子関係親密さ尺度の探索的因子分析

先行研究において、親子関係親密さ尺度の関係性の認知の尺度では、複数の項目において多重負荷の問題が見られることが指摘されている（山崎他, 2002）。そこで、本研究における本尺度の因子構造を確認するため、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。その結果、最終的に3因子21項目が抽出された（Table 1）。

第1因子は、「母を喜ばせることは、私の人生の目標の一つだ」「母親に頼りにされたい」「母親はいちいち言わなくても私の気持ちをわかってくれる」などの12項目から構成されており、山崎他（2002）の結果と同様であった。このため、第1因子は、山崎他（2002）と同様に「親密」とした。なお、山崎他（2002）では「従属」の因子に負荷していた「親の期待に背いても、罪悪感を感じることはあまりない」の項目も、第1因子に負荷し

Table 1 親子関係親密さ尺度の探索的因子分析

項目	親密	支配	服従	共通性
母親を喜ばせることは、私の人生の目標の一つだ	.82	.09	.04	.69
母親に頼りにされたい	.71	-.08	-.16	.52
母親は、いちいち言わなくても私の気持ちをわかってくれる	.71	-.03	.14	.55
私が何をしても、母親は最後はわかってくれる	.69	.04	-.14	.46
母親が困っていたら頼まれなくても積極的に助けようとする	.66	-.10	.03	.46
互いに何も言わなくても、互いに気持ちを察している	.65	.04	-.08	.41
母親は、自分の幸せよりも私の幸せを願っていると思う	.64	-.11	-.04	.43
母親が落ち込んでいると私も落ち込む	.62	.08	.11	.43
私は母親の考えていることがだいたいわかる	.58	-.04	.03	.34
母親は自分を犠牲にしても、私の希望をかなえようとする	.50	-.02	.13	.29
母親の敵は私の敵のような気がする	.37	.13	.22	.23
母親の期待に背いても、罪悪感を感じることはあまりない	-.35	.02	-.29	.24
母親に向かって、直接、批判的なことを言うことがよくある	-.04	.81	-.20	.65
嫌なことがあると、母親にあたってしまう	.06	.74	.11	.58
母親が不愉快なことを言ったら、その場で不満を言う	.12	.64	-.39	.48
母親が私の思い通りにしてくれないとすぐに不愉快になる	-.10	.57	.21	.41
すべてを言わないと母親がわかってくれない場合イライラする	-.17	.56	.27	.46
母親の提案を断るときは、はっきりと断るのではなく、少し曖昧に答える	-.05	-.25	.69	.47
母親にいろいろ言われると自分の考えがわからなくなる	-.09	.16	.68	.52
母親の言うことには従うことが多い	.22	-.00	.56	.40
母親に非難されるととても気になる	.11	.30	.45	.36
因子寄与	4.90	2.57	2.27	
因子間相関				
親密	—			
支配	-.05	—		
服従	.15	.17	—	

ていた。しかし、因子負荷量は負値であったことから、内容的に親密を表すと判断し、本研究ではこの項目についても第1因子に含めた。

第2因子は、「母親に向かって、直接、批判的なことを言うことがよくある」「嫌なことがあると、母親にあたってしまう」「母親が不愉快なことを言ったら、その場で不満を言う」などの5項目から構成された。これらの項目は、原版の親から子への結びつきを表す「甘え（依存）」（山崎他, 2002）とは異なり、母親を自分の思い通りにしたいという欲求を表すと考えられたため、新たに「支配」と名付けた。

第3因子は、「母親の提案を断るときは、はっきり断るのではなく少し曖昧に断る」「母親にいろいろ言われると自分の考えがわからなくなる」「母親の言うことには従うことが多い」などの4項目から構成された。これらの項目についても、原版の子から親への結びつきを表す「従属」（山崎他, 2002）と異なり、母親の言うことに従うことを表すと考えられたため、新たに「服従」と名付けた。以後の分析では、探索的因子分析により得られた下位尺度得点を使用した。

使用変数の記述統計量と α 係数

使用変数の記述統計量と α 係数を算出した（Table 2）。いずれの変数の α 係数も.70以上であった。

Table 2 使用変数の記述統計量と α 係数

変数	項目数	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
母親との援助関係				
親密	12	3.13	0.70	.88
支配	5	2.81	0.95	.79
服従	4	3.11	0.93	.71
心理的距離	1	5.09	1.37	—
援助要請行動				
援助要請過剰型	4	4.16	1.94	.96
援助要請回避型	4	3.04	1.54	.90
援助要請自立型	4	5.17	1.12	.74

仮説1・2の検討

親子関係親密さ尺度の親密、支配、服従を独立変数、心理的距離を仲介変数、援助要請スタイル尺度の過剰型、回避型、自立型を従属変数とする

パス解析を行った。独立変数間および従属変数の誤差項間に共分散を設定した。その結果、モデルの適合度はGFI=.97, AGFI=.90, CFI=.96, RMSEA=.08であった（Figure 1）。親密は心理的距離と正の関連（ $\beta=.67, p<.01$ ）が見られたが、支配（ $\beta=.12, ns.$ ）と服従（ $\beta=-.06, ns.$ ）は心理的距離と有意な関連が見られなかった。心理的距離は過剰型と正の関連（ $\beta=.49, p<.01$ ）、回避型と負の関連（ $\beta=-.49, p<.01$ ）が見られたが、自立型とは有意な関連は見られなかった（ $\beta=.01, ns.$ ）。

仮説3の検討

母親との同居の有無と性別により、母親との援助関係と心理的距離、援助要請行動との関連が異なるかを検討するため、分析対象者を性別（男性・女性）と母親との同居の有無の組み合わせで4群に分類したうえで、仮説1・2で検討したモデルについて多母集団同時分析を行った。なお、今回の調査において性別がその他に分類される回答は1件のみであったため、その他と回答されたものは除外し、男性または女性と回答されているもののみを分析の対象とした。本研究では、①パス係数、共分散、誤差項の全てに等値制約を課さないモデル、②パス係数にのみ等値制約を課すモデル、③パス係数と共分散に等値制約を課すモデル、④パス係数、共分散、誤差項の全てに等値制約を課すモデルの4つのモデルを作成し、モデル間で適合度を比較した（Table 3）。その結果、 χ^2 値の増分は全てのモデルで有意ではなかったが、他の適合度の指標では①のモデルの適合度が最も高かったため、①のモデルを採用した。男性の結果をFigure 2、女性の結果をFigure 3に示す。

母親と同居している男性では、親密は心理的距離と正の関連（ $\beta=.70, p<.01$ ）が見られ、心理的距離は過剰型と正の関連（ $\beta=.48, p<.01$ ）、回避型と負の関連（ $\beta=-.49, p<.01$ ）が見られた。一方で、母親と別居している男性では、親密は心理的距離と正の関連が見られたが（ $\beta=.90, p<.01$ ）、心理的距離はいずれの援助要請行動とも有意な関連は見られなかった。

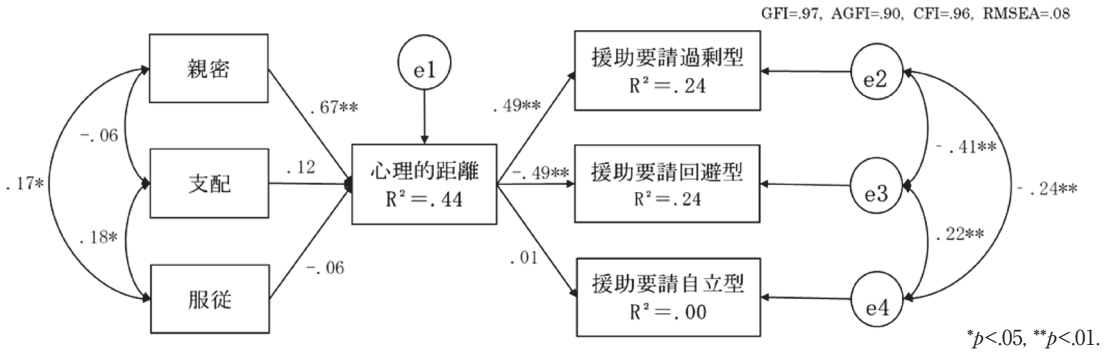


Figure 1 仮説1-2のパス解析結果

Table 3 多母集団同時分析のモデル適合度

モデル	χ^2	df	p	GFI	AGFI	CFI	RMSEA
①	44.62	36	0.15	0.94	0.8	0.96	0.04
②	67.26	54	0.11	0.9	0.8	0.94	0.04
③	89.83	72	0.08	0.87	0.79	0.91	0.04
④	102.65	84	0.08	0.83	0.78	0.91	0.04

注) ①パス係数, 共分散, 誤差項の全てに等値制約を課さないモデル, ②パス係数にのみ等値制約を課すモデル, ③パス係数と共分散に等値制約を課すモデル, ④パス係数, 共分散, 誤差項の全てに等値制約を課すモデル。

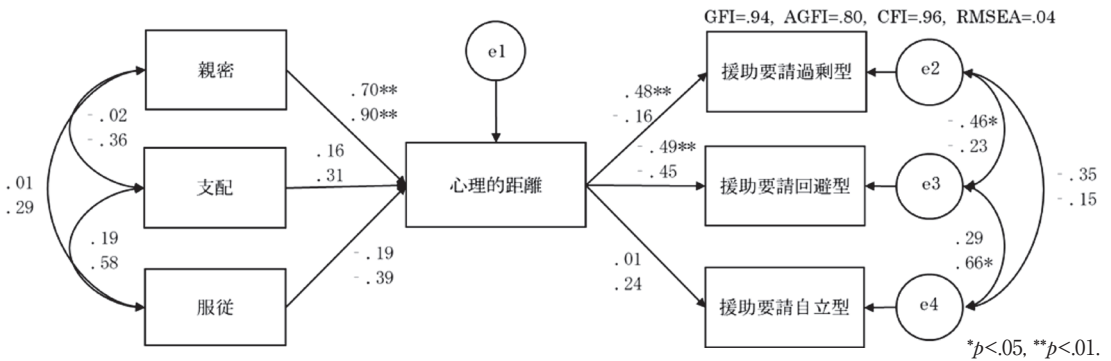


Figure 2 多母集団同時分析の結果 (男性)。上段の母親と同居の者, 下段は母親と別居の者の係数を表す。

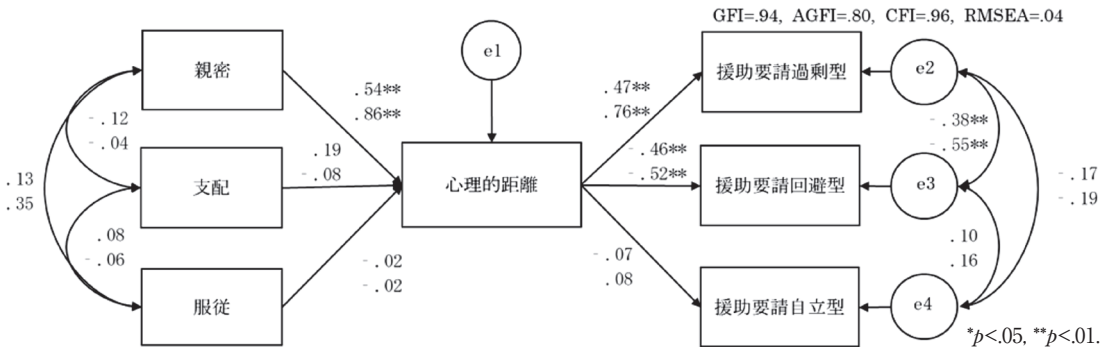


Figure 3 多母集団同時分析の結果 (女性)。上段の母親と同居の者, 下段は母親と別居の者の係数を表す。

女性では母親との同居の有無を問わず、親密は心理的距離と正の関連（同居： $\beta=0.54, p<0.01$ ，別居： $\beta=0.86, p<0.01$ ）が見られ、心理的距離は過剰型と正の関連（同居： $\beta=0.47, p<0.01$ ，別居： $\beta=0.76, p<0.01$ ），回避型と負の関連（同居： $\beta=-0.46, p<0.01$ ，別居： $\beta=-0.52, p<0.01$ ）が見られた。

仮説4の検討

援助要請行動の性差を検討するため、援助スタイル尺度の過剰型・回避型・自立型を従属変数、性別を独立変数としたt検定を行った。なお、今回の調査において性別がその他に分類される回答は1件のみであったため、その他と回答されたものは除外し、男性または女性と回答されているもののみを分析の対象とした（Table 4）。等分散性の検定を行った結果、いずれも等分散が確認された（過剰型： $F=0.42, ns.$ ，回避型： $F=0.20, ns.$ ，自律型： $F=0.66, ns.$ ）。過剰型は女性の方が得点が高く（ $|t|(145)=3.02, p<0.01, d=-0.53$ ），回避型は男性の方が得点が高かった（ $|t|(145)=2.19, p<0.05, d=0.38$ ）。一方で、自立型では有意差は見られなかった（ $|t|(145)=1.96, ns., d=0.34$ ）。

Table 4 援助要請スタイルにおける性差

	男性		女性		t	d
	M	SD	M	SD		
援助要請過剰型	3.52	1.98	4.51	1.83	3.02**	-0.53
援助要請回避型	3.41	1.60	2.83	1.48	2.19*	0.38
援助要請自立型	5.42	1.01	5.04	1.16	1.96	0.34

* $p<0.05$, ** $p<0.01$.

考察

本研究は大学生を対象として、母親との援助関係と心理的距離、援助要請行動との関連について、母親との同居の有無と性別を考慮して検討した。親子関係親密さ尺度の探索的因子分析の結果、親密において原版（山崎他, 2002）とは異なる因子に属した項目が1つあった（「母親の期待に背いても、罪悪感を感じることはあまりない」）。支配・服従の下位尺度においては、原版では同一の項目がそれぞれの下位尺度に含まれていたが、それらの項目は除外され、残りの項目は原版と同様であっ

た。このことから本研究で再構成した親子関係親密さ尺度は、原版とほぼ同様の内容であると考えられる。

母親との援助関係と心理的距離・援助要請行動の関連

パス解析の結果、母親と親密なコミュニケーションが取れている場合には心理的距離が近くなり、たとえ解決が容易な問題であっても母親に相談する（依存する）傾向が高く、相談しない傾向が低いことが示された。一方で、支配と服従の関係性および自立型は心理的距離と有意な関連は示されなかった。したがって、仮説1は親密において、仮説2は過剰型と回避型において支持された。親子関係親密さ尺度の親密は母子の相互的な結びつきを表すことから、心理的距離が近くなり、子どもが悩みを抱えた場合には解決のために母親に頼る傾向があると言える。一方、支配（親から子への結びつき）や服従（子から親への結びつき）は母子の一方的な結びつきを表す。このことから、一方的な援助関係は心理的距離とは関連しないことが考えられる。また、過剰型（容易に援助要請を行う）や回避型（一切援助要請を行わない）は援助要請の有無を表すが、自立型は自分で問題解決に挑み、どうしても解決困難な場合に援助要請を行う傾向を指し、援助要請を自分で問題解決が出来ない場合の対応策と考えていることを表す。このことから、援助要請を問題解決が出来ない時の対応策と考えている場合には、心理的距離と関連しないことが考えられる。

母親との同居の有無と性差

多母集団同時分析の結果、男性で母親と同居している場合は、母親との援助関係が親密であるほど母親との心理的距離が近く、心理的距離に近いほど過剰型の援助要請が多く、回避型が少ないことが示された。一方で、母親と別居している男性では、母親との援助関係が親密であるほど母親との心理的距離に近いものの、心理的距離と援助要請行動との間には有意な関連が見られないことが示された。また、女性では、母親との同居の有無

にかかわらず、母親との援助関係が親密であるほど母親との心理的距離が近く、心理的距離が近いほど過剰型の援助要請が多く、回避型が少ないことが示された。これらの結果から、仮説3は一部支持された。

母親とは幼少期から密接な結びつきがあり、青年期になっても母親との結びつきが大きく崩れることはないとされている(金子, 1989)。このことから、男女ともに同居・別居どちらの場合でも母子の親密さが高いほど心理的距離が近くなると考えられる。一方で、男性の場合にはたとえ母親と親密な関係であっても、同居の有無で心理的距離と援助要請行動の関連に異なる結果が得られた。このことから、男性の場合には母親に援助要請をするかどうかは物理的距離の遠近が関係しており、母親との間に物理的距離がある場合にはたとえ心理的距離が近くても、母親への援助要請行動につながらないことが考えられる。

援助要請行動の性差

女性は男性と比べて過剰型の援助要請が多く、男性は女性と比べて回避型の援助要請が多いことが示された。一方で、自立型の援助要請については性差が見られなかった。女性は問題が深刻でなく自分自身で解決できるものであっても母親に援助を求める傾向があり、男性は問題が自信で解決できない場合にのみ援助を求める、あるいは問題の程度に関わらず一貫して援助要請を行わない傾向にあることが示唆された。これらの結果から、仮説4は過剰型と回避型においては支持されたが、自立型においては支持されなかった。

援助要請スタイルの性差は、女性は過剰型が多く、男性は回避型が多いとされており(永井, 2017)、男性は女性に比べて援助要請行動が少ないこと(永井, 2012)や男性は援助要請を行う際に援助要請行動のコストや援助要請回避の利益を高く予期すること(永井・鈴木, 2018)が示されている。これらの知見は本研究の結果とも一致する。大学生を対象とした援助要請行動の先行研究では、援助を求める相手として母親を取り上げたものは見当たらないが、本研究の結果から、母親

に対しても先行研究で示されてきたものと同様の性差があることが考えられる。一方で、Cohen(1988)の基準に従えば、回避型の性差の効果量は小程度であることから、回避型の援助要請行動については男女の違いはそれほど大きくないことが考えられる。

本研究の強みと今後の課題

本研究は、大学生を対象とした援助要請行動に関する先行研究では知見が限られていた家族に対する援助要請行動について、特に先行研究においてほとんど検討されていない母親との援助関係と心理的距離に焦点を当てて検討した。大学生は学業や人間関係など様々な悩みを抱える時期である。性別と母親との同居の有無の組み合わせによって、母親との心理的距離と援助要請スタイルとの関連が異なるという本研究の知見は、男性の大学生にとって母親が相談対象になりにくい要因を明らかにし、大学生の援助要請行動を促進していくための有用な知見を提供すると考えられる。

一方で、本研究にはいくつか限界がある。まず本研究は横断調査であるため、得られた知見の因果関係については言及できない。次に、本研究の対象者は1大学の学生に限られているため、得られた知見を一般化することはできない。3点目として、本研究では心理的距離を1項目で測定しているが、本尺度の妥当性は検証していない。このため、心理的距離については妥当性が確認された尺度を使用して、本研究の結果が再現されるか検討する必要がある。4点目として、本研究では援助要請行動を行う際の相談内容を特定していない。永井(2012)は、援助要請行動は問題の内容によって援助を要請する程度や方法、援助を求める対象が異なることを指摘している。このため、今後は相談内容によって、本研究で得られた結果が異なるかについても検討する必要がある。最後に本研究では大学生を対象としたが、一般的には大学生よりも高校生以下(特に小学校高学年から中学1・2年生)の方が母親との親密性は高く、距離感も近い傾向にあることが指摘されている(落合・佐藤, 1996)。このため、今後は高校生以

下を対象とした研究も行う必要がある。

引用文献

- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 藤井 恭子 (2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 金子 俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 木村 真人・水野 治久 (2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究, 37, 62-71.
- 小林 后 (2019). 援助者と被援助者の心理的距離に影響する構成要素—文献レビューからの考察— 学校臨床心理学研究, 17, 83-95.
- 小高 恵 (2008). 青年の親への態度についての発達の変化—心理的離乳過程のモデルの提案— 大成学院大学紀要, 10, 31-48.
- 水本 深喜 (2019). 青年期から成人期への移行期にある女性の母親との関係の発達の变化—精神的自立と親密性の観点から— 青年心理学研究, 30, 115-129.
- 永井 智 (2012). 中学生における援助要請意図に関連する要因—援助要請対象, 悩み, 抑うつを中心として— 健康心理学研究, 25, 83-92.
- 永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から— 教育心理学研究, 61, 44-55.
- 永井 智 (2017). 援助要請スタイルと愛着および適切な援助要請行動の関連の検討 立正大学心理学研究所紀要, 15, 25-31.
- 永井 智 (2019). 援助要請スタイル間の差異に関する探索的検討—援助要請過剰型・回避型の特徴— 教育心理学研究, 67, 278-288.
- 永井 智・鈴木 真吾 (2018). 大学生の援助要請意図に対する利益とコストの予期の影響 教育心理学研究, 66, 150-161.
- 落合 良行・佐藤 有耕 (1996). 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 武田 裕子・石田 弓 (2013). 青年期における両親への相談行動について—利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて— 広島大学心理学研究, 13, 191-209.
- 山崎 瑞紀・杉村 和美・竹尾 和子 (2002). 「親子関係の親密さ」尺度の構成, 及び発達差の検討—日本的相互協調性の視点から— 日本青年心理学会大会発表論文集, 10, 76-79.
- 與久田 巖・太田 仁・高木 修 (2011). 女子大学生の援助要請行動の領域, 対象, 頻度と大学生活不安および社会的スキルとの関連 関西大学社会学部紀要, 42, 105-116.
- 吉岡 和子・野口 彩夏 (2019). 親との心理的距離及び子どもの夫婦関係の認知と「頼れる感」の関連 福岡県立大学心理臨床研究, 11, 33-41.

This study examined the association between one's relationship with one's mother, the psychological distance from one's mother, and help-seeking behavior by using data collected from 148 university students. This study also examined differences in the relationship by sex and whether they lived with their mother or not. We measured individuals' relationships with their mothers using the Family Closeness Scale (Yamazaki, Sugimura, & Takeo, 2002), and the psychological distance from their mothers by using one item developed based on Yoshioka & Noguchi (2019), and help-seeking behavior by using the Scale of Help-Seeking Style (Nagai, 2013). Explanatory factor analysis was conducted on the Family Closeness Scale. The results showed that the psychological distance from one's mother was closer when the relationship with one's mother was intimate, and that the closer the psychological distance is from one's mother, the greater excessive help-seeking style and less frequent were behaviors avoiding help-seeking. Meanwhile, there was no significant relationship between psychological distance from one's mother and help-seeking behaviors in male participants who did not live with their mother.

Key word: help-seeking, psychological distance, the relationship between mother and child